

ディセルタションとエッセイ

—論文構造と思考法の仏米比較—

渡 邊 雅 子

ディセルタションとエッセイ

—論文構造と思考法の仏米比較—

*渡 邊 雅 子

1. はじめに—21世紀にフランスの思考表現スタイルを問う意味
2. 構造に現れる論理
 - 2-1 論理的であるとは—論理とレトリックの違い
 - 2-2 構造から生まれる論理
3. フランス式論文の特徴—アメリカとの比較から
 - 3-1 ディセルタションとエッセイの構造
 - 3-2 アメリカの新たな思考表現スタイルの成立
 - 3-3 論理はどこから生まれるか—「問題の本質」と「統合」、「部分」と「全体」の不思議
4. ディセルタションの成立—古い教育と新しい教育の統合
 - 4-1 古い教育—ギリシア・ローマの遺産
 - 4-2 新しい教育—「暗記・模倣」から「批評」へ、「修辞学」から「国民文学」へ
 - 4-3 「新しい教育」は教育を刷新したか
5. 結語—21世紀におけるディセルタションの意義

1. はじめに—21世紀にフランスの思考表現スタイルを問う意味

グローバル化と情報化により、求められる能力や知識・技術の平準化が進むと言われる一方で、21世紀においても私達は近代の学校の枠組みの中で、国ごとに異なる教育を受けている。グローバル化の象徴であるOECDのPISA（国際学力達成度試験）テストは、各国の教育の質とレベルが同じ指標によって序列化できるかのような錯覚を与える。しかし、学力も、リテラシーも、求められる能力も、それを育む教育も、それぞれの国の社会・経済・政治のあり方と歴史的経緯とは無縁ではいられない。グローバル化された世界で必要とされる国際標準の学力なるものと、その世界で適用されるルールは誰が決めるのか、そのルールでゲームに参加すると誰が有利になるのだろうか。

日本ではよく「欧米」とひとくくりに論じられるが、ヨーロッパとアメリカは思考法においてもその表現法においても大きな違いがあり、アメリカはむしろ特殊

なケースである。しかしながら日本で長らくモデルにされてきたのはアメリカであった（尾崎 1999）。グローバル化の標準もアメリカ主導のもとに作られており、先述したPISAの定めるリテラシーやコンピテンシーの評価基準もアメリカの心理学や労働経済学を基にした、優れてアメリカ的価値観を打ち出したものである（松下 2010, pp.11-16）。そのようなアメリカ主導のグローバル化とアメリカ型モデルに早くから異を唱え、独自の考え方や価値観を発信してきたのはフランスである（ドゥブレ 2006）。フランスで学力といえは「フランス語」の能力を指し、教育で問題になるのは、PISAの順位ではなく、フランス語試験の点数の推移である。むしろフランスの教育と社会も様々な問題を抱え、さらに教育と社会はひとつの完結したシステムとして機能するので、フランスモデルの日本への安直な移植は不可能である。しかしながら、独自の指標と基準を作り出して世界に存在感を示すことができる源はどこにあるのか、どのような原理でフランスの教育と社会は動いているのかを探ることは意味があるだろう。その際、長らく日本のモデルであったアメリカとの比較は、フランスの特徴を理解する補助線の役割を

* 名古屋大学大学院教員

果たす。

本稿では、フランスの大学入試から大学の学位審査試験、官吏登用試験まで幅広く用いられ、この様式で書いたり考えたりできないと中等教育の修了資格も、高等教育の学位も、職業や社会的地位も得られないといわれるフランス式論文、ディセルタションの論理構造とその特徴を見ていく。ディセルタションはラテン語論述から生まれた単なる「論文の様式」ではない。この論文を書く練習が、すべての人文・社会科学を考える際の考え方の基礎となり、フランス革命後の社会の要請に応える「新たな教育モデルの核」になっているのである (Chervel 2004, p.273)。

2. 構造に現れる論理

2-1 論理的であるとは一論理とレトリックの違い

論理的である、あるいは論理的と感ずる根拠はどこから来るのだろうか。「論理的思考」の重要性が日本でも喧伝されて久しいが、教育関係の書物をひもとくだけでも、何が論理的であるのか、その定義は多様である。多くの書物では「論拠を示して意見を述べること」を「論理的であること」の基本要件として挙げている。しかし、そもそもあることがらが論理的に正しいかどうか証明できるのは、論理学の「形式論理」においてのみである。形式論理とは、例えば $A=B$, $B=C$ ゆえに $A=C$ のような三段論法や、数学の証明に用いられる公理を指す。それに対して人を説得する技術は、レトリック（修辞学）の分野で扱われるものであり、この2つの違いをまず理解することが重要である。論理的な正しさは形式論理的にしか証明できないものである一方、レトリックは、聞き手あるいは読み手に白のものを黒と思わせることも可能にする説得の技術である (香西 1998, p.1)¹⁾。本稿が問題にするのは、形式論理ではなく、書き方・話し方の構造、すなわちどのような順番で何を述べるのかによって、いかなる「論理的な筋道」が立てられるのか、何が必要な情報になり、何が不要になるのか、何が話しのポイントになるのかである。レトリックの一側面であるが、単なる技術を超えて、書き方・話し方の構造をもとに、どのような考え方や感じ方を含めた世界を切り取る「枠組み (frame)」が作られるのか、メタ認知的なスキームができるのかに焦点を当てる。それを「思考表現スタイル」と呼ぶ²⁾。

2-2 構造から生まれる論理

私たちがものを理解する時、すべての情報を受け取っているわけではなく、重要な情報とそうでないものをより分け、その取捨選択のうえに、ある出来事や状態を始めと考えたり、途中経過と考えたり、終わりと捉えることによって、つまりなんらかの構造を与えることによって、初めてそれぞれの出来事に意味を与えている (Bruner 1996)。出来事はばらばらに理解されるわけではなく、初め・中・終わりの区切りと順番をつけることによって、私たちはそれをひとつの物語のような意味のある現実として認識することができるのである (Mink 1978; Bruner 1990)。

どれを初めとして、どれを終わりにするのは、話し手個人の解釈による。しかし個々の内容を離れて形式のみに注目すると、どの文化にもそれぞれに固有のパラグラフ（段落）の順番と構造があると指摘されている (Kaplan 1966)。したがって、ある言語特有のパラグラフの順番を学ぶことは、その言語特有の論理システムを学ぶことにほかならないと言語学では考えられている。逆に論理的でないと感じるのは、ある言語や文化に特有の考え方の順番から外れている時だとも指摘されている (ibid., p.4)。

話の筋が通っている (logical である) と感じるために必要な要素は2つある。それは「統一性 (unity)」と「一貫性 (coherence)」であると言語学者のカプラン (R. Kaplan) は述べている (ibid., p.4)。統一性とは、説明に必要な部分がすべて揃っていると生まれる感覚であるのに対して、一貫性とはそれら必要な部分が読者に理解可能な順番で並んでいると生まれる感覚である。いくら必要な材料がすべて揃っていても、それが読者の期待する順番に並んでいないと、論理一貫性がなく、納得できない感情が起こると言うのである。

この文化・言語に固有の語る順番は、神話や物語の様式などに現れることが多く、歴史の叙述法にも見いだすことができると言われる (White 1978)。そしてその文化に典型的な語りの「順番」に従えば、遠い過去の出来事をなじみ深く感じると同時に、そのような典型的な語りは、出来事の理解に方向性を与え、出来事に対する感情の色合いすら決めると分析されている (ibid., pp.49, 52)。これら歴史学の考察を裏付けるように、認知心理学の分野でも、同じ物語を異なる国の被験者に聞かせてその記憶を再現させてみると、自分の文化にそぐわない部分は省略されたり順番が入れ替わったりして、自己の文化の説明様式に合うように再解釈されてしまうことが確認されている (Bartlett 1995)。

3. フランス式論文の特徴—アメリカとの比較から

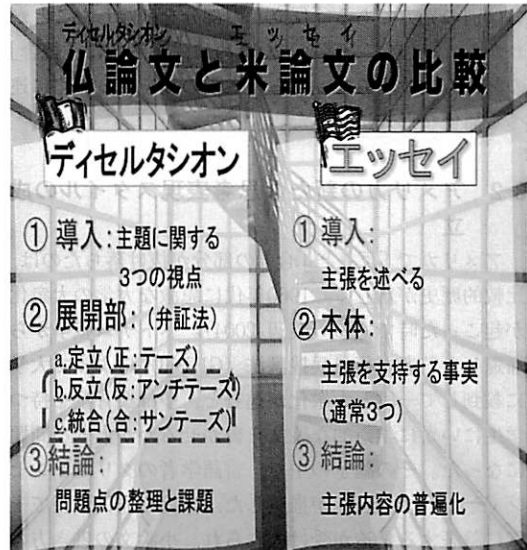
3-1 ディセルタシオンとエッセイの構造

ではフランスとアメリカで頻用される論文構造がどうなっているか比べてみよう。アメリカではエッセイと呼ばれる論文形式が初等教育から高等教育まで科目や学問分野に拘らず用いられており、フランスではディセルタシオンと呼ばれる論文形式が、後期中等教育から高等教育、官吏の登用試験まで広く用いられている。フランスではディセルタシオン以外にも、文学ではコメント (*le commentaire composé*) や創作 (*l'écriture d'invention*)、哲学ではテキスト解釈 (*l'explication de texte*) などの論文形式が使われるが、異なる科目や学問分野に共通して使われる基本形はディセルタシオンである。ディセルタシオンを始めとするこれら論文様式は、書き方の様式を超えて、人文や社会科学を学ぶための、そして深く考える能力を養うための演習のバリエーションと考えられている。習った知識をこれらの論文形式に落とし込むことによって、知識を構造化し、筋道を立てて論を展開する練習を行うのである。アメリカもフランスも学力はこれら小論文によって測られ、特にフランスの大学入試にあたるバカロレア（大学入学資格試験と中等教育修了試験を兼ねる）では、日本のセンター試験やアメリカのSATに見られる多肢選択問題は出題されず、3時間半から4時間に及ぶ大論述問題と20分間の口述試験で合否が決定される。中等教育の修了資格から高等教育への入口と出口、そしてフランスで最も社会的威信が高いとされる高級官吏の試験まで、ディセルタシオンの習得如何によって人生の岐路が決定されるといっても過言ではない。エッセイはアメリカを中心とした英語圏で広く使われているのに対して、ディセルタシオンはフランス語を話す文化圏 (*francophone*) で使われ、アングロサクソンと大陸ヨーロッパの考え方の違いを示すひとつの指標にもなっている。

まずは明快なアメリカのエッセイから見ていこう。エッセイは、提案・説得・論証を主な目的とする論文形式であり、「主張提示」・「主張の論拠」・「結論」の3部構造になっている（図1参照）³⁾。

この3部構造では最初に作者の主張を述べ、次にその主張を裏付ける証拠を挙げ例を述べて、最後に主張が正しいことを最初とは異なる表現で繰り返す。実際の思考の過程では、観察やデータの分析から徐々に結論に向かって推論を進めていくのだが、それをエッセイとして書くには、結論を先に述べて実際の思考過程

図1: ディセルタシオンとエッセイの構造比較



を倒立させる。それゆえ、後に続く文章では主題に関係することがらだけを書き、主題提示とそれに続く主題の証明は相互に緊密に結ばれている。このようなエッセイの構造の特徴は、標的に突き進む矢にしばしば喩えられる。最初に述べた筆者の主張が論文の「標的」になり、その後続く文章は、その標的を目指して真っ直ぐに最短の経路をたどって突き進んでいく矢のイメージである。実際、良いエッセイの要件として挙げられるのは、導入で明瞭に主題が示され、主題に対して十分な事実の裏付けがあること、それ以外の余分な要素がなく簡潔・明瞭に書かれていることである（渡辺 2004, pp.51-52）。

それに対してフランスのディセルタシオンは、やはり3部構成を取るが、その中身はエッセイとは異なり正・反・合の弁証法を基本構造にしている。後述するように実際の論文構造はより複雑だが、ここでは比較のために単純化した構造を示そう。まず導入では、中心になる主題を提示し、論文を通してどのようにテーマを論じるかの全体構成を示す。次に本体部分では、テーマに対するある見方（正）を示し、次にそれとは相反するあるいは異なる見方（反）を提示する。そして最後に、これら2つを統合する第三の見方（合）を提示する。結論部分では、これまでの議論をまとめて議論で明らかに出来なかった点を指摘し、そこからさらなる問題提起をして終わる（Renauté et al. 2002, pp.181-182）。

この論文構造をアメリカのエッセイと比べると、図1に示されたようにアメリカでは主張をわかりやすく

するため、最初に提示した主張とは反対のもの、あるいは別の見方である「反立」の部分を取除いたことがわかる。「反立」を落としたために、必然的に「統合」の部分も抜け落ちて、自らの主張のみを真っ直ぐに述べる簡便な形式になった。

3-2 アメリカの新たな思考表現スタイルの成立

アメリカで「反」と「合」の部分が抜け落ちたのは、比較的歴史が新しく、1960年代に急激な大学の大衆化が起こった時である（渡辺 2004）。ベトナム戦争から帰還した若者が復員兵援護法（GI Bill）によって大学に殺到して一段と大衆化が進むと、多様な背景を持つ学生にいかんが学術的な論文を書かせるかが大きな問題になった。その論争の中で、言語学者のクリステンセン（F. Christensen）が推奨した、結論を先に置いて一気に論証する構造が受け入れられ、小論文の書き方の主流になっていった⁴⁾。最初のパラグラフを読むだけで論文の主旨がわかる演繹的な書き方は、読み手を迷わせず、かつ学生が試験問題に的確に答えられる簡便さが長所とされた。何より、「反」と「合」が抜け落ちたことで、相反する複数の視点から論じて、そこから新たな視点を導き出す「複雑性」が論文の必要要件から外れた。「反」と「合」の削除によって、効率性と、文化的背景や共通の教養・知識を基にしない、大衆民主主義的な書き方を手に入れた。

論文の書き方を含めた作文法は、イギリスやスコットランドを含めたアングロサクソン文化圏で幾度かの革新は行われてきた⁵⁾。しかしながら、弁証法に最も特徴的な「反」と「合」を落としたことで、アメリカが論文形式を通してフランスを始めとする大陸ヨーロッパの思考表現法と決別し、独自のスタイルを創り上げたことが看取できる。

3-3 論理はどこから生まれるか—「問題の本質」と「統合」、「部分」と「全体」の不思議

・「問題の本質」—「問う」能力と合理的な繋がり

エッセイと比較してディセルトションを特徴づけるものは2つある。ひとつは「問題の本質（*problématique*）」と呼ばれる主題提示の方法と、もうひとつは正と反を「統合」した第三の見方の提示である。導入部分の主題提示では、何が中心的な問題になるのか、主題を具体的な文脈の中に位置づけて発展させ「問題提起」を行う。論文の質とレベルを決定する最も重要な部分は、この「問題の本質」の設定である。論文試験で与えられた問いに答える際、その問い

が「何を求めているのか」問題の核心を書き手が主題として設定するのである。さらに書き手が設定した主題に沿って、主題に斬り込む問いも自ら立て直すことが要求される。ディセルトションの試験風景を分析した住谷（2005）の論文を例に説明しよう⁶⁾。「フランスはヤンキー化したか」という問いに答えるために、あるフランス人受験者は「問題の本質」を「フランス人のアイデンティティー」と設定した。この受験者は、フランスのヤンキー化について述べることは、アメリカという外部の影響が及ぶことによるフランスのアイデンティティーの揺らぎを探ることだと考えた。そのためにはアイデンティティーとその変化、変化に対する反応の3つの要素間の関係を描くことが論文の中心になると判断する。こうして一度抽象化した「問題の本質」を、次に具体的な問いの形に変換する。正反合の3部にそれぞれ対応する「問い」が論文の構造を決め、それらの問いに答えるためにはどのような具体的な内容が必要かを示す。図2に実際に書かれた導入部の構造を示した。導入部は論文全体の地図（プラン）を示すので、この部分を見れば全体の構成もよくわかる。

図2：ディセルトション導入部＝全体構造の地図

- 1) 主題の具象化と概念定義：アメリカ建国時からのフランスへの影響をもとに「ヤンキー化」とは何かを定義
- 2) 「問題の本質」提示＝主題の抽象化：
フランスのヤンキー化を問うこと＝外部要素の導入によるアイデンティティーの揺らぎを探ること。
1) アイデンティティーと2) その変化、3) 変化に対する反応の3要素間の関係を描く
- 3) 「問題の本質」を「問い」へ変換＝抽象から具象への転換：
正：「問題とは何か、交流なのか侵略なのか」
反：「何がヤンキー化に貢献し、誰が抵抗するのか」
合：「外からはどう見えるのか、内からはどうか」
- 4) 全体の構成＝変換した「問い」にどう答えるか：
正：米・仏の交流とアメリカ化の歴史背景分析
反：アングロサクソンから見たフランス、フランス人の考えるフランス
合：フランスは外部・内部から見てアメリカ化されたか

（住谷他 2004より筆者作成）

続く展開部では導入部で示された地図に従って、正反合の各部分をさらに下位の2つないし3つの異なる観点から論じる。例えば、「正」の部分の「 Yankee化は一方的な文化の侵略なのか双方からの交流なのか」という問いに対しては、まず1) アメリカの影響の歴史的起源を明らかにし、次に2) アメリカの知的領域におけるフランスからの影響を述べ、最後に3) 現代のフランスへのアメリカの影響について言語、若者文化を例にその経過を考察する。ここまでは歴史的背景と考察が主になる。転じて「反」の部分では、「ではフランスとは何か?」と問い、フランス人が自己に対して持つ考えと、フランス外部の者がフランスを見る見方の2つの視点から論じる。フランス人が自己について持つ考え方は、さらなる3部の下部構造1) アメリカ化と、2) アメリカ化に対する知的抵抗、3) フランスの国粹主義的側面から論じる。同様に外部がフランスに対して持つ考えを、2つの下部構造、1) アングロサクソンの見方と2) それ以外の地域の見方に分けて論じる。そして結論では論文全体から浮かび上がるフランスの特徴を複数述べ、フランスのアイデンティティーの未来に言及して終わる。

この例からわかるように、正反合それぞれの部分においても、必ず複数の側面から論じるのがディセルタシオンの特徴である。ひとつの問いに対して、できる限り異なる側面から考える仕掛けが論文の構造に盛り込まれている。このような議論の広がりや現実世界の複雑性を反映させる構造を生かすも殺すも、どのような「問題の本質」を立てるかによる。フランス文学者の篠沢(2002, p.115)によれば、フランス式論文では、出題される「問い」は「口実」に過ぎず、与えられたテーマに対していかに大きな構図を描くか、つまり主題に対して「パノラマを展開する」ことができるかが重要であると述べている。

これがアメリカ式エッセイならば、「フランスは Yankee化したか」という問いに「 Yankee化した、しなかった」の二元論でどちらかの立場を選んで主張とし、その論拠を述べて結論付けて終わるだろう。エッセイでは、根拠として述べた具体例の間の関係を示すことも要求されていない。むしろそうした記述は、話の筋道を見えにくくする邪魔物である。何より「問題の本質」を書き手が勝手に立てようものなら、「質問に答えていない」、ゆえに「評価不能」と処理される。エッセイでは与えられた問いに単刀直入に答えることが必要要件である。

他方ディセルタシオンを書くことは、「問題の本質」を繕り出す訓練であり、「問い」を作る、つまり「問

う」訓練であり、物事を複数の視点から見る訓練、そして複数の視点間の関係を見出す訓練でもある。堅牢な構造を持ちながら、逆説的にディセルタシオンでは自由奔放に時間・空間を駆け巡る議論ができるのも、問題の本質を繕り出す作業が書き手に任せられるからである⁷⁾。「型をふまえてしかも独創的」(篠沢 2002, p.109)というフランス式論文の理想もまさにここから発する。

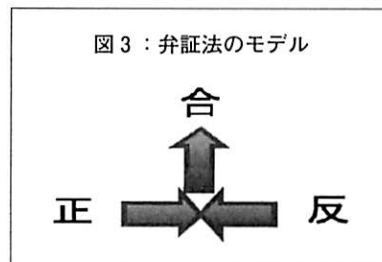
ディセルタシオンにおける論理性は、各部分の議論がいかに逸脱することなく「問題の本質」と密接に関わっているか、さらに本論の各部分とその下位部分において、先行する部分が後続の部分と密接に関わっているかの緊密性から生まれる。マニン (A. Magnin) は、論文における部分相互の繋がりを、論理的な繋がり以上の「合理的繋がり」(住谷他 2005, p.72)と呼んでいるが、現実には無数に存在する「問題の本質」に切り込む視点の幾つかを選択し、それらを誰が読んでも納得できる構造に配置するという作業は「論理」を超えた「合理性」の問題になるのであろう。

「問題の本質」に様々な角度から光を当てるため、多様な事例で答えつつ、抽象と具象を行ったり来たりしながら、問題の本質の全体像を現わす努力を行う。むしろ神様ではないので、人間にはものごとの全体像を見ることはできない。しかし、事柄やその背後にある概念の「合理的な繋がり」を発見していくことでより大きな像を描こうとするのである。

・統合 (synthèse) — 包括的視点

弁証法を基本構造にするディセルタシオンで最も難しいとされるのが、どのように「統合」を行うかである。論文の書き方の指南書では「正と反の矛盾を解決する第三のもの見方」と定義されているが、反は必ずしも正と対立する必要はなく、正とは異なる面を提示してさらなる議論を呼び起せばよいとも述べられている (Rénauté et al. 2002, p.181)⁸⁾。通常「正」の部分では一般的な見方を示し、「反」はそれを突き崩す見方、そして「合」は、議論のレベルを変えることにより「正」と「反」の両方を、対立関係なく含む状態を述べている (図3参照)⁹⁾。

つまり、あるレベルでは対立・矛盾する意見や現象



が、レベルを変えることにより、対立・矛盾が解消される。例えば、2人の人間が「個人」的な争いをしていく際に、そこに「国家」という異なるレベルを持ってきた途端に、議論は異なる方向に進む。ここでも何を問うているのか、問いの変換が劇的な変化を生む。

・「部分」と「全体」の不思議

論文作成の過程でディセルタションに必ず求められるのが、どの事実または概念を「正」にし、何を「反」にするのかだろう。それによって「合」の導き方も変わってくる。同じことがらが、全体のどこに位置付くかによってその意味付けが変わってくるのである。たとえば著名な例では、無神論者を論破するために書かれたパスカルの「パンセ」は、膨大な断章を残してパスカルが夭折してしまったため、それらの断片をパスカルが意図した全体の中に位置付けることが難しく、断片の一節が、パスカル自身が語っているのか、論破しようとしている無神論者に語らせているのかが不明である。しかしながら、誰もが知っている著名な一節は、パスカルが語っているのか、その論敵が語っているのかで、その意味付けは、実は全く違ったものになってしまう（竹田 1999, pp.142-145）。

2010年にバリ郊外のリセ(日本の高等学校にあたる)で筆者が観察した授業では、論文構造のエッセンスを伝える極めて象徴的な訓練が行われていた¹⁰⁾。「正」と「反」の役を2人の生徒に割り振って皆の前で討論させ、「合」を考えさせる練習である。通常頭の中で、次いで紙上で試行錯誤する論文の配置プランを物理的に「やってみる」のである。この練習の目的は、ディセルタションの構造を「体感」させるとともに、2人の役割を交代させると「合」も必然的に変わってくる不思議を生徒に理解させることだった。さらに別のテーマを与えて今度はグループに分かれて「正・反・合」の3つの役割を割り振って討論させた後、グループ間で生徒の交換を行って、最も据わりの良い整合性のある統合構造を考えさせて発表させる。これらの練習を通して、それぞれの「部分」は、独立して意味を持っているのではなく、全体の構造の中に配置されて初めてその意味が与えられることを生徒は学ぶ。これも弁証法の3部構成だからこそ理解できる、「意味が生まれる」からくりである。

実際の試験でディセルタションを書く時には、与えられた時間の3分の1は紙上で構想を考える時間に充てることが勧められており、このプラン(plan)と呼ばれる論文の設計図が、論文本体とともに評価の対象になる。3部構成の中でも導入部は最も重要な部分と

されるが、それは書き手が課題を理解してその「問題の本質」を掴んでいるか、そしてその主題をどのように論文全体で展開するののかの全体像が掴めるからである。「問題の本質」を繕り出す作業は、個別具体的な課題を「抽象化」することによってより大きな「全体」の中に課題を位置付ける作業でもある。「問題の本質」の決定と、論文「全体」の中で「部分」を考え配置する作業は、いずれも眼前の具体物とその背後にある概念の二重性を感じとる訓練であり、全体の中に位置付けることによって部分の持つ意味を「創り出す」訓練でもある。アメリカのエッセイが「一直線的に的を射る矢」のイメージならば、フランスのディセルタションは、論ずる対象の出来る限り大きな全体像(パノラマ)を描くために、高い場所から地平を見おろす「俯瞰図」のイメージである。「論文構想」を表すフランス語の「プラン(plan)」が、地図や設計図の意味を持つのも、俯瞰的イメージを象徴している。

4. ディセルタションの成立—古い教育と新しい教育の統合

ディセルタションは、ラテン語の論述(dissertatio)をもとに、フランスの学校教育の中で開発された、フランス起源の論文様式である。ディセルタションは、フランス革命後の新しい教育のシンボルとして、21世紀の現在に至っている。ディセルタションの登場は、ギリシア・ローマから中世を経てフランス革命まで中等教育の中心科目であった「修辞学」を吹き飛ばし、伝統的教授法の「模倣」と「暗記」をも吹き飛ばしたと言われる(Chervel 2004; Guiney 2004)。フランス教育史を綴ったプロスト(A. Prost)によれば、「教育の激変、それはラテン語の論述からフランス語によるディセルタションへ、論文構想(プラン)が文章スタイルを押し流し、批評が修辞学に取って代わる」ことであった(Prost 1968, p.248)。中世ヨーロッパの普遍主義から近代の国民国家と個人主義への思想枠組みの大転換の中、新しい時代の要求に応える教育を創造する産みの苦しみの中でディセルタションは生まれた。フランス革命後の紆余曲折を経て、この教育の大転換は19世紀の最後の20年間に起こった。論文のひとつの様式であるディセルタションがなぜ現代教育のシンボルとなり得たのか。まずは古い教育と新しい教育はどこが異なるかを検証し、新しい教育への移行を促した社会的背景を見ていこう。

4-1 古い教育—ギリシア・ローマの遺産

古い教育の象徴とされた修辞学は日本では馴染みが

ないが、長らく西洋の学問と教育の中心を占めた。修辞学は、議会や法廷での演説をまとめあげる技法としてギリシャで起こり、ローマの学校制度の中で体系的な完成を見た。それが中世ヨーロッパに受け継がれ、文法、論理学と並んで中等教育の中心科目になった。ローマの学校教育を伝えるクインティリアヌスの『弁論術』（紀元968年）には、2000年あまりの時を経て今なお西洋の作文教育の規範とされる段階的的作文演習法（*progymnasmata*）が詳しく記されている（Quintilian 1921-22）。段階的的作文演習法では、簡単なものからより複雑なものへ12種類の作文ジャンルが示されている（Murphy 2001, pp.35-78）¹¹⁾。これらすべてを習った後で、初めて生徒は自由に作文を書くことが許された。別の言い方をすれば、12の作文を終える頃には、あらゆる主題や状況で必要とされる言語能力を身につけるように綿密にカリキュラムが組まれていたため、ジャンルの選択と組み合わせを通して「文は人なり」の域にまで達した独自の言語活動が可能になったのである。作文演習が演説の原稿作りを目的に行われたことが象徴するように、作文の主な目的は、あらゆる形態の説得する技術を身につけることだった。

ヨーロッパの中世においては、すでにギリシア・ローマ文明の主要な局面はすべて知られていたが、古典文芸のどの部分に注目してどのような教育を行うかは、時代の要請により異なっていた（デュルケム 1981, p.339）。「討論と論理の時代」と呼ばれるスコラ哲学が支配的だった12世紀から16世紀にかけては、アリストテレスの三段論法に代表される形式論理が徹底的に学ばれた。討論の方法は、まず陳述者の主張に有利にはたらく理由のすべてを検討し、次にその反対の主張理由を検討する。この2つの相反する考えを聴衆に示して、陳述者自身の見解を述べ、それを正当であるとして、陳述者が退ける見解を支持するあらゆる理由を論駁する。これらの賛成、反対、主張、反駁はすべて三段論法によって明らかにされた（*ibid.*, p.276）。現在では真偽の確定には科学実験が当然のごとく使用されているが、実験的推論が知られていなかったガリレオやベーコン以前の時代には、数学を除いて、討論こそが最小限度の誤謬で真偽を区別できるただひとつの方法であるとされていた。そして討論の厳密さは、形式論理の正しい使用によって保証されたのである。

「人間復古」に象徴されるルネサンスに入ると、宗教論争のための無骨な形式論理の技術よりも、宮廷文化を反映した優雅で気の利いた表現や、当意即妙を可能にする言語技術、人を魅了する手紙を書く技法の育成へと教育の目的は移っていった。人間を中心とした古

典の文芸復興をいち早く学校教育に取り入れたのは、逆説的にもカトリックの一教団であるジェズイット（イエズス会）であった。ジェズイットの学校にあっては、古典文芸はルネサンス本来の目的を離れて、キリスト教の道徳の賛美と宣伝のために利用された。そのため古典文芸の思想や精神を伝える「内容」よりも、「形式」の習得に重点が置かれた（*ibid.*, p.503）。すなわち、古典語（ギリシア語・ラテン語）の習得と、古典文芸から引き出される修辞法（あらゆる種類の隠喩、比較や文体）の暗記と模倣である。文体の訓練や作文練習は、この時（16世紀）から行われるようになり、先述したクインティリアヌスの段階的的作文法が取り入れられた（*ibid.*, 394）。ジェズイットの教育はフランスをはじめとしたヨーロッパで大成功を収めた。それはこの教育によって実際にラテン語で手紙が書けるようになり、貴族の特権的文化を学校教育によって学ぶことが可能になったからである¹²⁾。ジェズイットの教育は、当時富を蓄えたブルジョア階級に熱狂的に支持された。

ジェズイットの教育は、フランス革命後も残った。革命後もフランス語作文の授業は全く無かった。フランス語はラテン語教育の後に、修辞学のクラスでラテン語論述の一種類として教えられていた（Chervel 2004）。修辞学のクラスでは、古代の偉大な作家の書き方がしみ込むように音読し、暗記し、模倣することが求められた。教師は取り扱うべきポイントをリストにして、時には文章ごと厳密に生徒に与え、生徒は作文する際、文章の配置やパラグラフの数すら自分で考える自由はなかった。教育の基本は、規範（*canon*）の習得にあった。書くことは、否応なく、繰り返すこと、真似ること、そして剽窃することを意味した。文学作品は、書くスタイルの育成のみに利用され、作品全体の内容が読まれることすら無かった。文学作品を理解するとは、細切れにされた作品の内容を別の言葉で言い換えることだった。

こうした16世紀半ばから続いたジェズイットの教育に変化が見られたのは、革命後およそ100年を経た1870年の普仏戦争後のことである。ドイツへの敗北は、国の威信を軍事・政治的な力ではなく、文化の力に求める気運を作り出した。国のプライドは文化的優位にあり、それを示すために国史と国語、市民道徳の教育の充実が図られた（Guiney 2004, p.113）。ギリシャ・ローマの古典より劣ると言われていたフランス文学は、敗戦と領地の喪失の反動から中等教育に導入された。そしてバカロレアの中心的な試験であったラテン語論説（*discourse*）は、1880年にはフランスの文

学と歴史についてのフランス語論文に取って代わられた。フランス革命後、幾度も試みられながら挫折し続けたフランス語を中心とした教育は、この時ようやく定着したのである。

4-2 新しい教育—「暗記・模倣」から「批評」へ、「修辞学」から「国民文学」へ

しかしながら、ラテン語なしのフランス語による教育は、教師を狼狽させた。長い間フランス語はラテン語をもとにあたかも外国語のように教えられていたので、まず教授法から作り出さなければならなかった。革命直後およそ1,500万人のフランス市民のうちフランス語をよく話せるのはわずか300万人ほどだったといわれる状況下で (Guiney 2004, p.25)、フランス語による新しい教育とはいかなるものか。何を目的にし、どのような形態になるべきなのか。その指標になったのが、フランス語によるディセルタシオンだった。

ディセルタシオンのもとになったラテン語の論述 (*dissertatio*) は16世紀から書かれており、学者が主に宗教論争を行う際に使われた (Chervel 2004, pp.261-263)。もとになったラテン語論述自体が、修辞学が得意とする雄弁や華麗なスタイルよりも、新しい学説を論じる際に使われていたのは特筆に値する。学術論文から、大学の学位審査試験へ、そして中等教育の作文練習へと徐々にラテン語論述 (*dissertatio*) の適用範囲は広がっていったが、それがディセルタシオンへと変容を見せたのは19世紀初頭の哲学においてである。哲学では、自己が決定した論文構想に従って、主題を厳密に取り扱うことに主眼が置かれており、伝統的修辞法とは対立する原則に依っていた。ディセルタシオンは、ある学問分野の概観を示す概論 (*traité*) とは対立的なものであり、かといって論点が一点に集中するものではなく、また個人的な色合いが強く規則に縛られない随筆 (*essai*) とも異なり、意見書に近い。その究極の目的は、自己の意見の正当化よりも熟考と内省にあるとされた (Chervel 2004, p.261)。こうした古い教育とは対極にある特徴によって、ディセルタシオンはバカロレアで採用されることになり、公式な論文の書き方になったのである。

ディセルタシオンの作成は、それまでバカロレアの中心試験であったラテン語論説 (*discourse*) とは異質のものであることが明示された。ディセルタシオンにおいては、論文構想 (プラン) は生徒自らが考える。そして生徒が主体的に、主題の異なる側面を識別して価値付けを行う。旧知の知識を関係付け、自分自身で考えを発展させ、推論を極限まで推し進めて結論を導

く。伝統的な修辞学の技法は、ここでは全く役に立たないことに気づくことが必要だった。新しい論文様式では、厳密さ、明確さ、簡潔さが評価された。なにより、文学はスタイル模倣のための材料ではなく、テキスト自体を論じる、批判的側面を持つようになった。論文で高い評価を得るのは、生徒の文学的スタイルではなく、生徒が文学作品について、ある視点からまとまりのある論文の形で論じられるかどうかだった。その目的は、熟考により知性を鍛錬して、事実の分析と批評ができることだった (Prost 1968, p.246, Chervel 2004, p.261)。ディセルタシオンは、新しいタイプの知性を鍛錬するための演習として中等教育に定着していった。

ディセルタシオン導入により、新しい教育を実現する「形」は整った。次に問題になったのは、それを使って生徒に何を論じさせるか、その「中身」だった。ここで初めて国民文学としてのフランス文学が創設された。フランス文学のどの作品を規範と認め、共和国という新しい共同体のモデルとするのが、アカデミーや大学で議論され多数の論文が書かれた。その中でリヨン大学の文学部教授が、資格免許を取るための多様な試験でどの文学を取り上げるべきかの手引きを書き、そこで17世紀の文学の卓越性を述べた (Guiney 2004, p.50)。フランス文学の特殊性は、天才や神の靈感に頼らず、自らの力でそれらから自由になったことに求められるべきであり、それは靈感と非論理性・難解を特徴とするアングロ・ジャーマンの伝統とは対極にある。フランス革命の精神につながる「人間性」とこの世の道徳観 (「市民性」) を示すには、17世紀の偉大な作家が手本になるというのである。この主張は広く受け入れられ、1880年代以降の中等教育の教科書は17世紀のフランス作家の独壇場となった。

もうひとつの新しい内容は、歴史と文学史である。国民国家という人工的な共同体作りのためには、その根拠として国史が必要不可欠だが、同様の論理で文学史が作られた。さらに、文学批評は主観的であるという批判に対して、文学史という新たなジャンルを創設して学校教育における文学理論を正当化した (Guiney 2004, p.197)。こうして、学校は国家文化創設のための大なる実験場になった。その手段として使われたのが、新しい知性の「形式」としてのディセルタシオンであり、「内容」としてのフランス文学と文学史だったのである。

4-3 「新しい教育」は教育を刷新したか

革命後200年あまりを経て、ディセルタシオンの登

場はフランスの教育の革新と継承にどのような役割を果たしたのだろうか。

フランス語によるフランス語のためのディセルタシオンは、ギリシャ語・ラテン語と修辞学に代わって、フランス文学と地理・歴史、哲学、市民教育を教育内容の中心に据えることを可能にした。ディセルタシオンは、教育課程を一新させた。また歴史的に分離していたエリートと大衆の教育を統合し、初めて一般中等教育の創設も可能にした。何よりこの新しい書き方は、知識と思考法の在り方を変えた。古典修辞学では、既存の集大成から演繹的に引き出される知識を一定の形態に当てはめて主張を正当化すること、そして過去の膨大なレパートリーの中から時と場合に応じて選択した修辞技法で人を魅了することが書くこと・話すことのものである。思考することでもあった。他方ディセルタシオンにおいては、書き手は既存の知識と自己の観察・経験を帰納的に関係付けて、それらの配置を考えることにより、知識と経験の新しい関係を見出すことが求められた。ディセルタシオンの構造を最大限に生かし、主題に対していかに包括的な構図を描いてみせられるか、具体と抽象を行きつ戻りつ、主題の本質、つまり抽象化された全体像に迫れるかが重要であった。このディセルタシオンの特徴を中心に、新たな教授法も構成された。

では、フランスの教育はディセルタシオンを通して全く新しいものに生まれ変わったのか。結論を先取りすれば、フランスは革命後も古いものを捨てなかった。まず古典語は課されなくなったが、古典古代の内容は、知識として哲学とフランス文学の教科書に残された。古典の哲学は、哲学教育の核としてバカロレアの中心テーマに残った。そしてフランス文学の中心とされた17世紀の文学は、古典文学の模倣を特徴とし、古代と現代、古典とフランスの橋渡しを行った。何が良い文学かの定義は、ラテン語、あるいはギリシャ語のテキストの模倣と文法と修辞の強調にあり、それらは文学研究の中心であり続けた（Guiney 2004, p.51）。さらに、修辞学の中心であった文体学習も、文学教育の中に残った。21世紀の「フランス語」バカロレア試験においても、作家の文体について述べることは必須事項であり、バカロレアの出題形式には、その設立時から驚くべき継続性がある。文体は作品とそれを生み出した社会背景を分析するツールになった。また、学校で習得するフランス語を高級な言語形態（high register）とし、日常語を低級な言語形態（low register）と区別することで、母国語が古典語のような文化的、精神的価値を持つ根柢を作った（ibid., p.14）。

また教育方法においては、クインティリアヌスの段階的作文法をモデルにした段階的フランス語教育法が形成された。その頂点に立つのが、ディセルタシオンである。フランスでは、バカロレア合格を目指して、就学前教育から綿密なフランス語カリキュラムが組まれており、ディセルタシオンが書けるようになることを目指して教育内容と方法が作られていると言っても過言ではない。アメリカのエッセイは、その構造の単純さゆえに初等教育から盛んに書かれる。他方ディセルタシオンは、その複雑さゆえに後期中等教育まで書き方の教授は行われぬ。しかし、その基礎作りは段階的に積み重ねられ、生徒の準備は出来ている。すなわち、小学校では正しい綴り字と文法で「描写」が出来ること、体験や物語が語れること、中学校では自己の体験や主観を離れて与えられた主題について論じられること、これらが基礎になって高校では弁証法を使って主題の本質を縊りだし、共有された知識から結論を導き出すのである。古典古代の演習とは内容が変わっても、弁証法の習得には、踏むべきプロセスと長い時間が必要であることに変わりはない。なにより、ディセルタシオンの基本構造である弁証法は、ギリシア・ローマの哲学者たちが時間をかけて練り上げ、中世のスコラ学を受け継がれた緻密な推論の技法であり、思考の型でもある。

なぜ古い教育が残ったのか。諸説挙げられるが、第一には、教育制度が整った第三共和制（1871-1940年）においては、革命直後の過激な革新への反動があった（Guiney 2004）。例えば、いきすぎた物質主義への傾倒—「言葉」と対立する「物」による教育—は、第三共和制では時代遅れになり、新たな教育の創造は、刷新ではなくいかに既存の遺産を受け継いでいくかという議論へ変容した（ibid., p.189）。共和国のための教育と教養、とりわけ文学を創出する際に、急進的な現代化と同一視されたのが、逆説的にも古代ギリシアだったのである（Chervel 2004, p.273）。さらに、第三共和制をリードした知識人や政治家たちは、ジェズイットの教育を受けたエリートであり、こと母国語教育においては、彼らは新しい世界観を打ち出すことは出来なかった。無から新たなものは作れず、何らかのモデルが必要だが、政策を推進するリーダー達にとってジェズイットの教育は身近なものだった。彼らは古典文芸に愛着を持ち、その教育法も好ましいものとして思い出されていた。そして、その教育こそがエリートである彼らをそれ以外の集団と区別する手段になっていた。さらに、新興国ドイツの科学技術の優位に対抗するには、ドイツを後追いする科学エリートの養

成ではなく、むしろギリシア・ローマの遺産の後継者としてラテン諸国を結束させるという戦略が採られた。表面的な変化が大きければ大きいほど、教育実践哲学における実際の変化は小さかったと言われる。第三共和制下の教育研究を行ったギネー (M. Guiney) はこう結論付ける。「実際、真に決定的な変化は起こらなかったのである」(Guiney 2004, p.209) と。

しかしながら、古典古代がそのままフランス革命後の教育と思考法に蘇ったとは考えるべきでなく、歴史的遺産を内包しつつ新たなステージに上ったというのが妥当な見方であろう。ディセルタションは、ギリシアの哲学者の跡を継いでローマ人が体系化し、それを中世スコラ哲学が発展させた歴史的發展プロセスを、その構造に内包している (CherVEL 2004; 住谷他 2005, p.76)。ジェズイットの教育もまた、近代の国民文学の中に、すなわちディセルタションで論じる際の共通教養たるフランス文学の中に残った。視点を単一化し、単純化する、つまり捨てることによって革新し続けるアメリカとは対照的に、フランスは古いものを捨てずに新しいものを付け加えることで伝統を作る。21世紀の教室でディセルタション試験を受ける学生はこう述べる「古代ギリシアの知識人がおり、彼らに触発されたローマの著作家が後を継ぎ、中世スコラ学がローマ人を見做った。……フランス人はこの知性の鍛錬場の生ける管理人たることを、誇りに思っている」(傍点は原文のまま) (住谷他 2005, p.76)。

5. 結語—21世紀におけるディセルタションの意義

フランスの「共和国」とアメリカ型「デモクラシー」の比較の中で、ドゥブレ (R. Debray) (2006, p.13) は、後者の学校が「社会に対して開かれて」いるのに対して、前者の共和国の学校は「固有の規則を持った閉ざされた場所」であると述べている (傍点は原典のまま)。ドゥブレの意味するところは、アメリカの学校の目的は労働市場に見合った生産者養成であるのに対して、フランスでは、自律的に考え判断することができる市民の養成にある。つまりアメリカでは学校が社会の要求に応じて変革し続けるのに対して、フランスではあらゆる領域の影響から独立した学校に社会が従属するという。この比較は、フランスの教育文化と思考表現法を考える上で示唆的である。

生き馬の目を抜くグローバリズムと高度情報化社会にあっては、その能力養成にも、作成そのものにも多大な労力と時間を要するディセルタションは、いかに

も非効率的で不利である。「反」と「合」を切り捨てたアメリカのエッセイは、視点をひとつに絞り、思考の効率化を図ることによって新しい時代のルールを作ってきた。しかしながら、フランスがその存在感を持ち続けられるのは、それとは対極の位置に思考表現法と価値を置いたことにある。共通の教養をもとに、世界の複雑性と多面性、矛盾の中からより整合的な視点を導くディセルタション。しかし、時代は一巡りして今やディセルタションがその先端を行く観がある。ポストモダンの現代においては、問いは与えられるものではなく、自ら創り出すものであり、多様な視点からより包括的な視点を獲得する思考法こそが、単一な視点とルールを強要するグローバリズムの対抗軸になり得るのである。

〔注〕

- 1) 香西 (1998, p.1) は、「説得にとって論理的であること—正確に推論・論証されていること—は、必須ではない条件の一つにすぎない」と述べている。
- 2) 「順番から生まれる論理」の理論と方法論については、詳しくは渡辺雅子, 2004, 『納得の構造—初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社の第一章を参照されたい。
- 3) 中等・高等学校向けの作文法のガイドブックには、エッセイを3つのタイプ—説明 (expository), 説得 (persuasive), 語り (narrative) —に分けて論じるものが多いが、ここではその区分を超えて、初等から高等教育まで最も頻繁に使われる「5段落エッセイ (five paragraph essay)」と呼ばれる一般的な型を示した。
- 4) 原典は、Christensen, Francis. 1965. "A Generative Rhetoric of the Paragraph." *College Composition and Communication* 16: 144-156. Kobayashi, Hiroe. 1984. "Rhetorical Patterns in English and Japanese." *Ed. D. dissertation*, Department of Applied Linguistics, Teachers' College, Columbia University, New York, p.17より引用。
- 5) 19世紀から20世紀にかけてのアメリカの作文法の変化とその社会的要因、アメリカの書き方の源流となったヨーロッパの作文法の変化の詳細については、渡辺雅子, 2004「二つの日米逆転現象 アメリカ作文教育の源流と革新」『納得の構造—日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社, pp.99-110を参照のこと。
- 6) 本論文はフランス式論文の作成過程を実際の試験に近い状況で再現しており、日本語でフランス式論

- 文のエッセンスを理解できる数少ない論考のひとつである。
- 7) コメントなどの他の形式と比べても、ディセルトーションは議論や具体例や引用を行う際に個人的な考えを取り入れることができる利点があると述べられている (Rénauté et al. 2002, p.18)。
- 8) ディセルトーションを書き慣れた学者でも論理的に破綻せず均衡を保って書くために「合」を独立して書かない場合も多く、「合」を結論部分で軽く触れて「正・反・結論」の構造で書いても良いとされる (住谷 2005, p.72)
- 9) 例えば竹田 (1999, pp.147-148) は、パスカルの『パンセ』の一節から正と反によるラセン的上昇の思考法について以下のような例を挙げて説明している。以下の+, - 記号は正と反にあたる (以下原文のまま)。「民衆は、高貴な生まれの人たちを尊敬する(+)。中途半端な識者は、生まれなど、その人自身の特権ではなく、偶然によるものであるとって軽蔑する(-)。真の識者は、民衆の思考ではなく、「パンセ・ド・デリエール」(背後の思考)によって、その人たちを尊敬する(+)」竹田は、正・反・合の弁証法的な発展を無限に続けることができることをこの例をさらに続けることにより示している。
- 10) 2010年3月15日フランス語の授業(2nde = 日本の高校1年生にあたる) Lycée International, Saint Germain-en-laye 調査ノートより。
- 11) 12種類の作文ジャンルとは、寓話に始まり、物語、格言、諺、論破と確証、共通拠点、顕彰誹謗、比較・原因結果、演技、描写、定説と続き、最後は法律の信任・不信任の議論で締めくくられる。12の演習は、現代の作文ジャンルと異なるため理解しづらいが、寓話や物語を自分のことばで語り直すことから始めて、人物や物の賞賛、非難のしかた(顕彰誹謗)、格言を使い読み手の感情を喚起しながら道徳・規範を確認する様式(共通拠点)、未解決の社会問題を論ずる様式(定説)、仮想状況での独白(演技)などには、いかなる順番や構成でどのような技術(比較・比喩・敷衍など)を使うべきかが細かく記されている (Murphy 2001; Quintilian 1921-22; キケロー 2000)。
- 12) デュルケム (1981, p.525-526) によれば、ジェズイットが考案した競争と個人教授制度がルネサンスに芽生えた個人化の風潮に適合したこともジェズイット教育の成功要因として挙げられている。

〔引用文献〕

- Bartlett, Frederic C. (1932) 1995. *Remembering: A Study in Experimental and Social Psychology*. New York: Cambridge University Press.
- Bruner, Jerome. 1990. *Acts of Meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- _____. 1996. *Culture of Education*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Christensen, Francis. 1965. "A Generative Rhetoric of the Paragraph." *College Composition and Communication* 16: 144-156.
- Chervel, André. 2004. "L'invention de la Dissertation Littéraire dans l'enseignement Secondaire Français." *Pedagogica Historica* 40(3): 261-277.
- キケロー, 2000, 『キケロー選集 6』岩波書店.
- デュルケム・エミール, 1981, 『フランス教育思想史』小関藤一郎訳 行路社 (= Durkheim, Emile. 1938. *L'évolution pédagogique en France*. Paris: Felix Alcon.)
- Guiney, Martin M., 2004, *Teaching the Cult of Literature in the French Third Republic*. New York: Palgrave MacMillan.
- Kaplan, Robert B. 1966. "Cultural Thought Patterns in Intercultural Education." *Language Learning* 16: 1-20, p.14.
- Kobayashi, Hiroe. 1984. "Rhetorical Patterns in English and Japanese." Ed. D. dissertaion, Department of Applied Linguistics, Teachers' College, Columbia University, New York.
- 香西秀信, 1998, 『修辞的思考—論理でとらえきれぬもの』明治図書.
- 松下佳代編, 2010, 『"新しい能力"は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房.
- Mink, Louis. O 1978. "Narrative form as a Cognitive Instrument." Pp.129-149 in *The Writing of History*, edited by Robert H. Canary and Henry Kozicki. Madison, WI: The University of Wisconsin Press.
- Murphy, James J. 2001. "The Key Role of Habit in Roman Writing Instruction." Pp.35-78 in *A Short History of Writing Instruction*, edited by J. J. Murphy. Mahwah NJ: Lawrence Erlbaum.
- Prost, Antoine. 1968. *Histoire de l'enseignement en France 1800-1967*. Paris: Armand Colin.

- 尾崎ムゲン, 1999, 『日本の教育改革』中央公論新社.
- Quintilian. 1921-22. *The Instituto Oratoria of Quintilian 4 Volumes*, translated by H. E. Butler. Cambridge: Harvard University Press.
- Rénauté, Brigitte, Anne-Marie Cléret and Monique Bouchard-Lespingal, 2002, *Bac Entraînement L'épreuve écrite de Français 1ers*, Paris: Hachett.
- 篠沢秀雄, 2002, 『フランス三昧』中央公論社.
- 住谷裕文・ブラウン・ロバート・サンボーン・向井邦夫・吾妻修・井上直子・松井勲・亀井一・赤木登代, 2004, 「フランスのディセプション (dissertation) 試験はいかに行われるか?—その受験風景 (上)—」大阪教育大学紀要第 V 部門 53 (2): 59-78.
- 竹田篤志, 1999, 『近代フランス哲学講義』論創社.
- 渡辺雅子, 2004, 『納得の構造—日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社.
- White, Hyden. 1978. "The Historical Text as Literary Artifact." Pp.83-104 in *The Writing of History*, edited by R. H. Canary and H. Kozicki. Madison, WI: The University of Wisconsin Press.

The *Dissertation* and the Essay, Two Styles of Thought: Analyzing the Differences in the Structure of French and American Academic Writing

Masako Ema WATANABE*

Using a structural comparison of the *dissertation* and the essay (French and American academic writing), this paper attempts to clarify the differences in thought and written expression of these writing structures in the two countries, examining the societal and cultural background that has influenced both styles of writing.

In contrast to the *dissertation*, which has a dialectical three-stage structure of thesis-antithesis-synthesis, the essay focuses on the thesis, the author's claims, and supporting evidence. The essay in its simplified structure is likened to the "arrow shot at the target" in a straight line, whereas the *dissertation* is more of a "bird's eye view" depicting the largest possible structural outline for the theme and the integrating of opposing viewpoints. The two styles clearly have contrasting features, for the essay places importance on creating a firm link between the claim and the grounds, while the *dissertation* accepts the complexity of the theme and attempts mostly to describe the full picture.

The elimination of the antithesis and synthesis from American academic writing is relatively recent, tracing back to the 1960s, when American higher education became rapidly popularized. It was created from the necessity to have a form of academic writing that could be easily written by students from diverse socio-economic backgrounds. The American style of essay is designed to work well in a popular democracy.

By contrast, the *dissertation* was introduced at the end of the 19th century as a symbol of the new society and education after the French Revolution. With the arrival of the *dissertation*, it can be said that the traditional education of France in the classical languages and rhetoric was transformed into a discipline that makes use of dialectics to build up a robust form of personal thought. However, the intellectual tradition descended from Greek and Roman thought remains in the dialectical structure of the *dissertation* and in the common culture of French literature and philosophy. The French *dissertation* presupposes that the educated are the successors of the ancients, their *raison d'être* based on a cultural superiority inherent in the classics, the knowledge of which inspires a method of thinking that necessitates a comprehensive viewpoint integrating opposing views. The dissertation, then, is the written embodiment of this pedagogical, philosophical perspective. I suggest that this way of thinking could offer a counterpoint to globalism, which imposes a uniform set of rules and viewpoints on everyone.

* Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University